四国大学文学部書道文化学科

第35回

教員展

ごあいさつ

四国大学文学部書道文化学科は、「書道に親しむ」から「書道を楽しむ」、さらに「書道を活かす」へと発展させ、書道文化の専門的探求を目指すユニークな学科です。

学生たちは、書道の「技術」「歴史」「理論」などを探求していく中で書道文化を理解し、また書の作品制作を通して自己を表現し、新たなことを創造する力を身につけていきます。本学科では、学生と教員が一丸となって元気に活動していることが特色です。学生が身につけた力は書道以外の分野でも応用範囲が広く、卒業後には様々な職業の中でそれを活かしています。

私たち教員も、教育と研究の責務を果たすべく日々取り組んでいます。この展覧会は、学科の専任と非常勤の教員が書法研究発表の場として年一回開催し、今年で35回目を迎えました。

時節柄、コロナ禍に対応した鑑賞法をお願いしております。また大学HPでの発表とこのパンフレット送付によって、学外の多くの皆様にも鑑賞していただきたく存じます。なにとぞ御高覧のうえ、御教示賜りますようお願い申し上げます。

（出品者一同）

【交流プラザ展】

会期　令和３年７月30日（金）～８月１日（日）　10：00～17：00

場所　四国大学交流プラザ３Ｆキャンパスギャラリー

【学内展】（受付はおりません）

会期　令和３年８月２日（月）～８月21日（土）　9：00～18：00

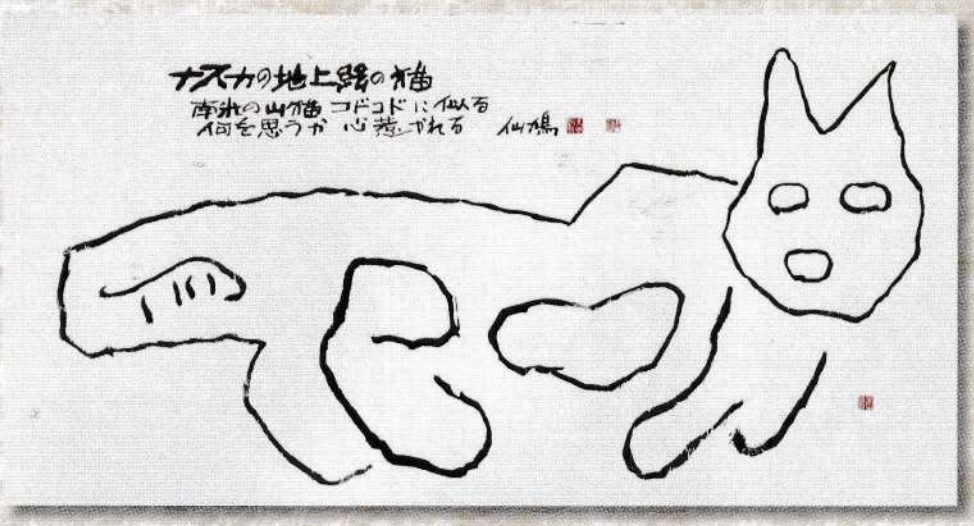
場所　四国大学　書道文化館１Ｆギャラリー

（但し、７～９日、12～16日は休館）

主催　四国大学 学際融合研究所 言語文化研究部門

（題字揮毫：辻　尚子、　背景：書道文化館５階より望む眉山と吉野川）

太田剛（仙鳩）

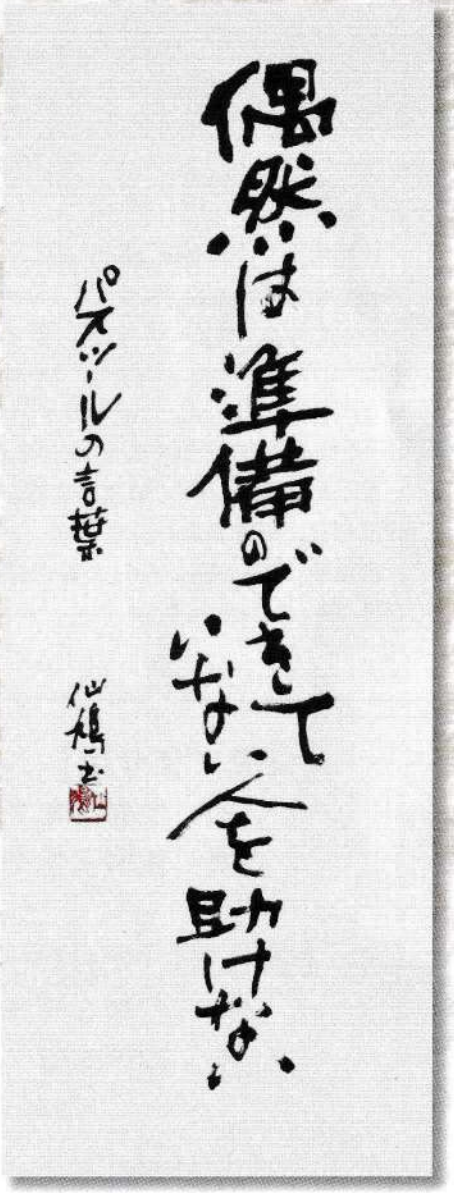


ナスカの地上絵「猫」

75×143

ハングル版本体「明けない夜は無い」

68×35



パスツールの言葉

91×35

辻　尚子（紅雲）

羅隱詩二首

天賜臙脂一抹腮　盤中磊落笛中哀
雖然未得和羹便　曾與將軍止渴來
佛屋前頭野草春　貴妃輕骨此爲塵
從來絶色知難得　不破中原未是人

225×53×2

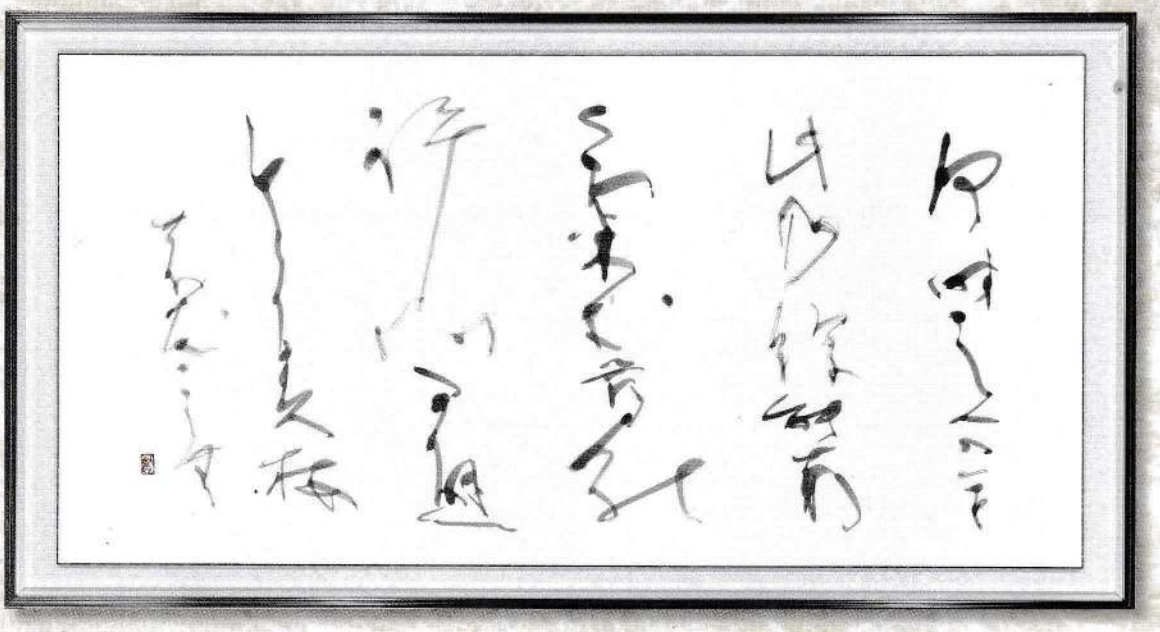
森上洋光

厳恭寅天命（厳として天命を恭寅す）

227×83×2

黒田賢一

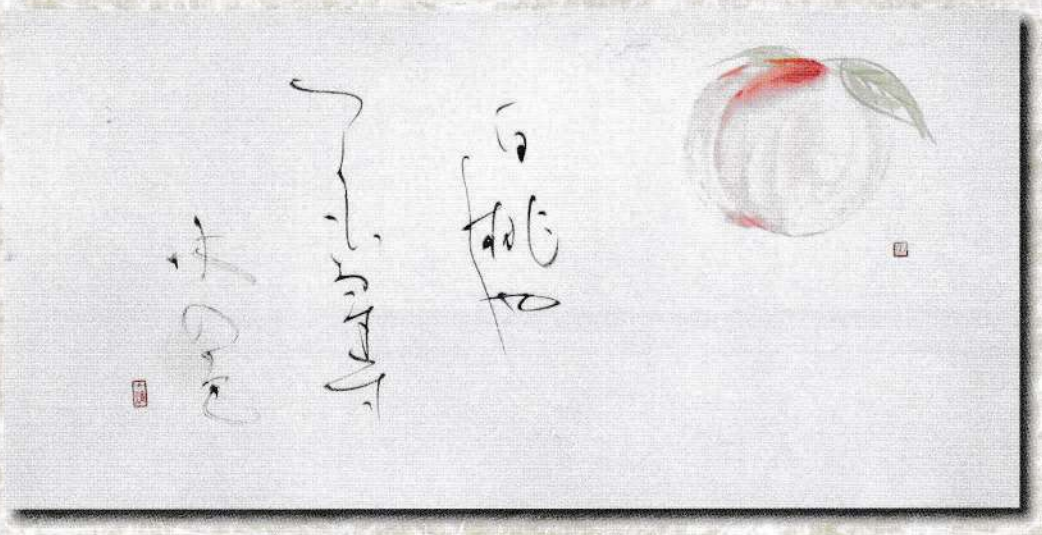
「梅の花」（『万葉集』より）



95×180

何時しかも
此の世の
明けむ鶯の
木伝ひ
散らす梅
の花見む

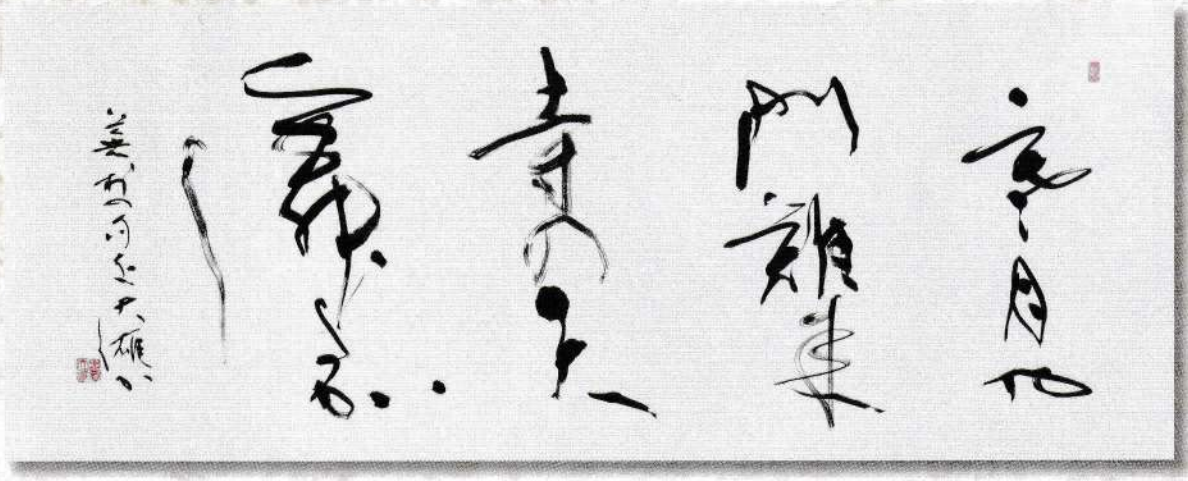
田ノ岡（たのおか） 大雄（だいゆう）



「桃」（桃隣の句）

34.5×68

白桃や
雫も
おちず
水の色



「寒月」（蕪村の句）

70×172

寒月や
門無き
寺の天
たかし

渡邊周一（星舫）

樂神仙道

6×6

壽與山斉福隨春至

5×5

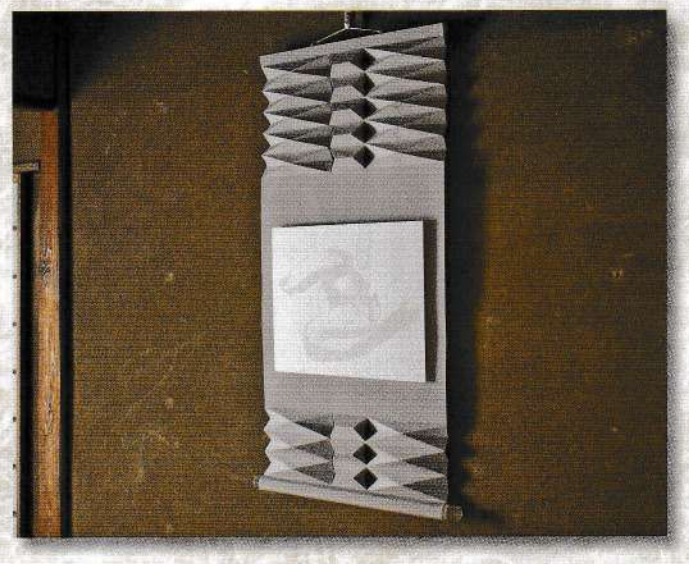
騰龍

6×6

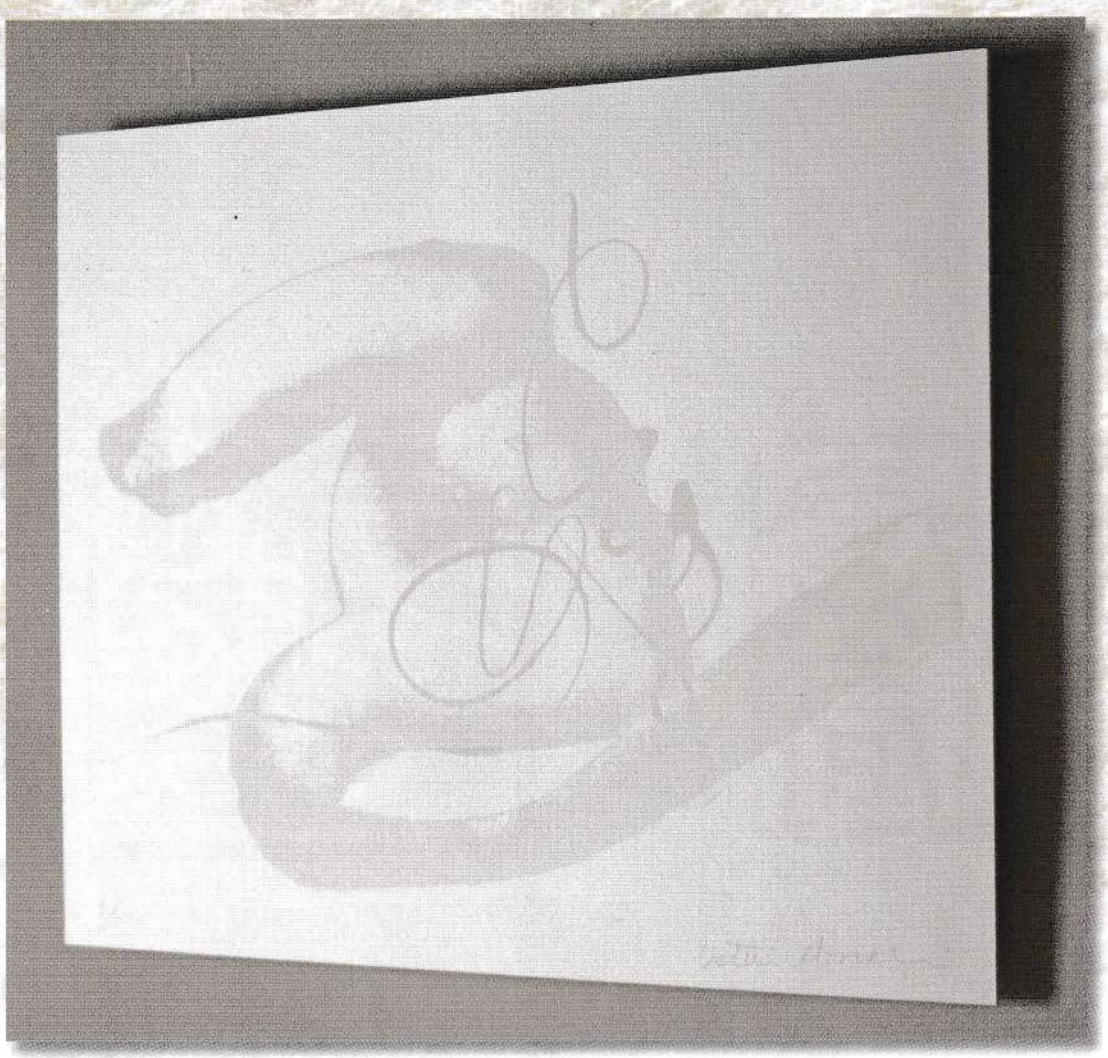
盡君飲

5.5×5.5

上田（うえた）　普（ひろし）



「ときめき」
（軸製作　辻めぐみ）



本紙 22.5×34　軸 79×47

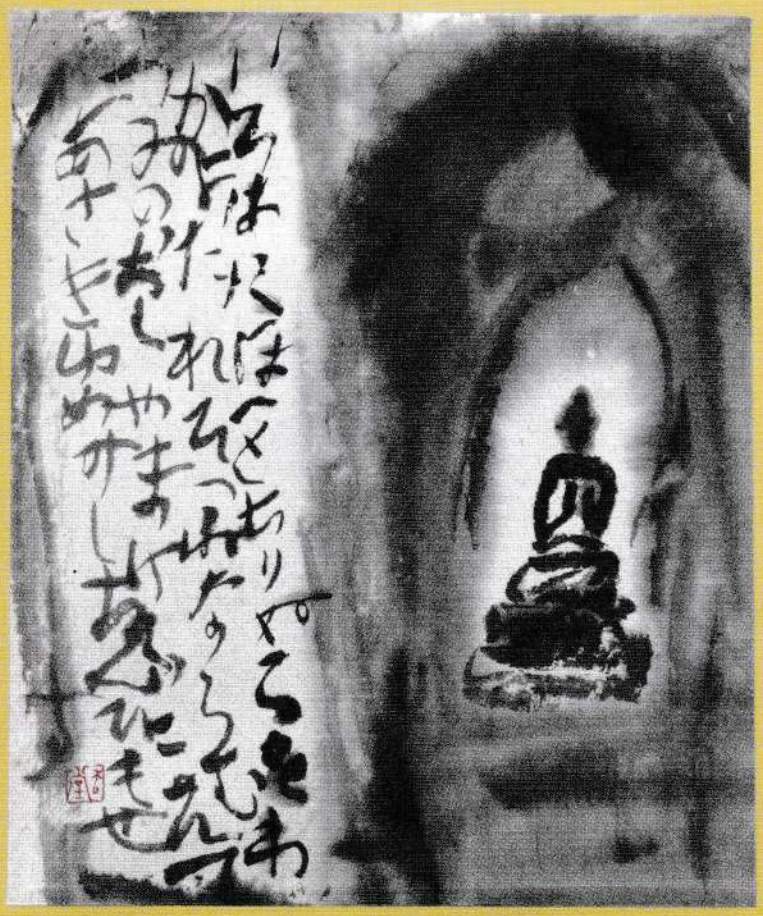
鹿倉壮史（碩斎）

周於能（『淮南子』の語）

32.5×11.5

黒木知之

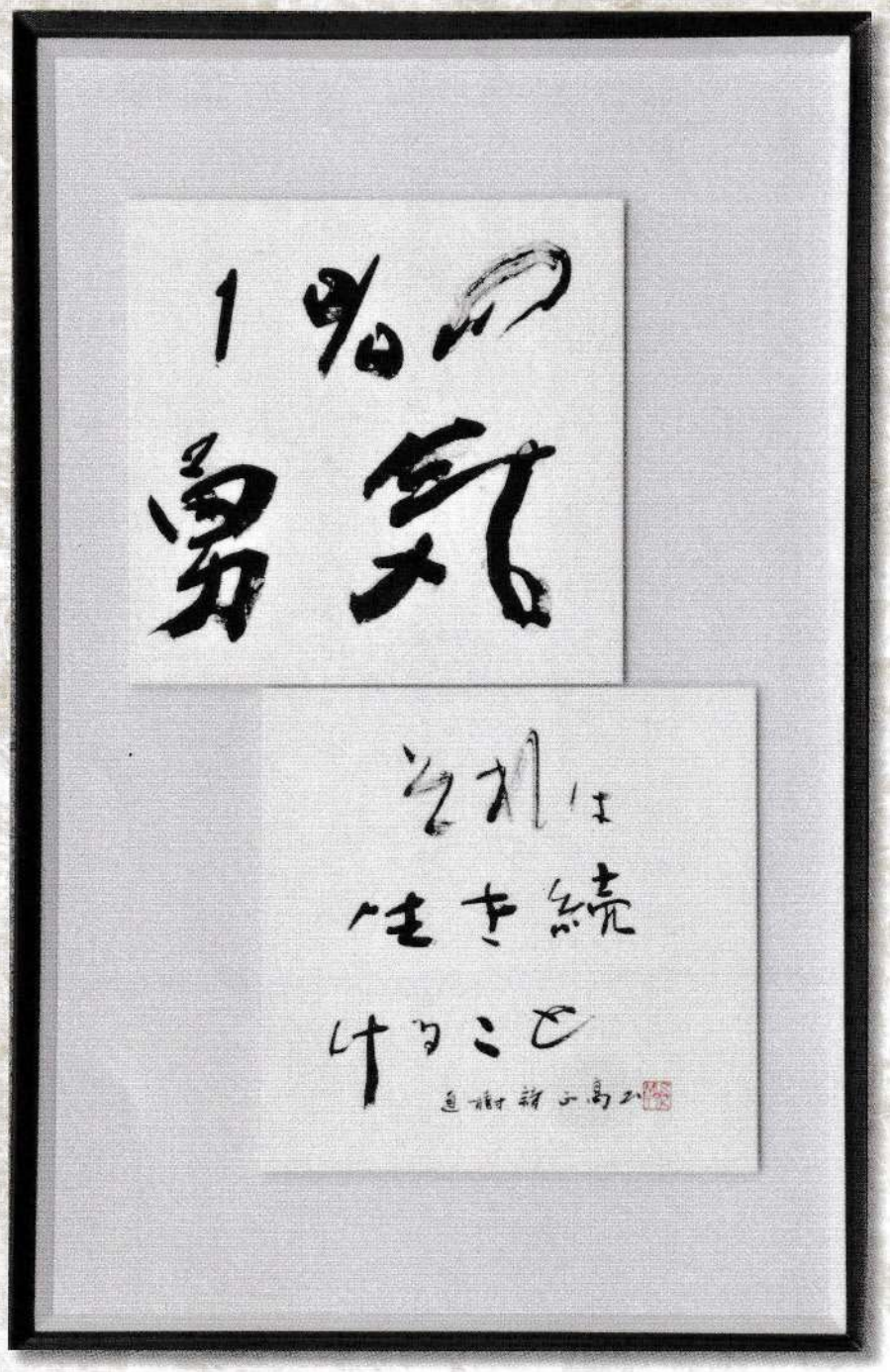
「いろは」



22×18.5

小竹正高

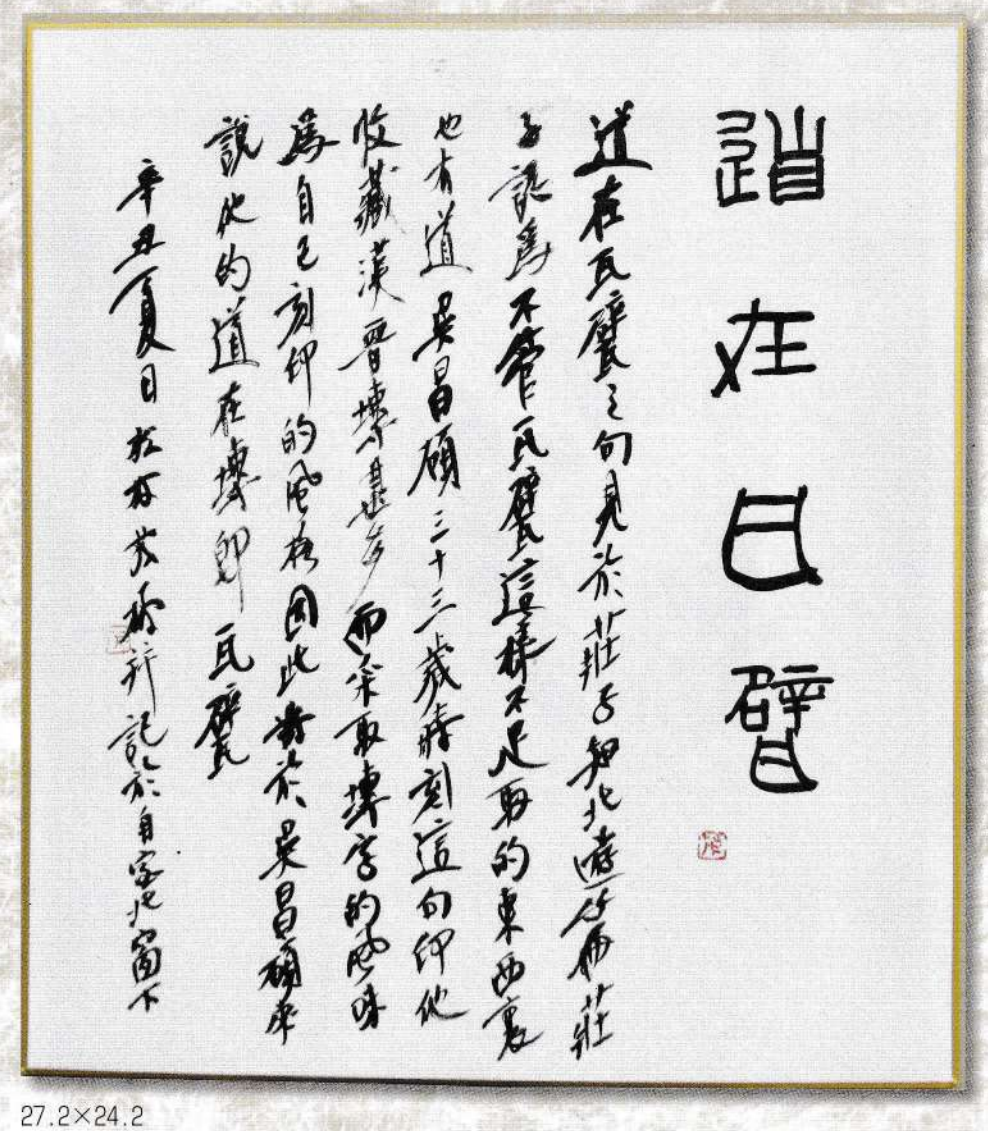
「1%の勇気」（東田直樹の言葉）



35×35×2

松村茂樹

關於呉昌碩的「道在瓦壁」（呉昌碩の「道は瓦壁に在り」について）



27.2×24.2

【口語訳】

道は瓦壁に在り

「道は瓦壁に在り」の句は、『荘子』「知北遊篇」に見える。荘子は、瓦壁（かわら）のような取るに足らないものにも道があると考えていた。呉昌碩は三十三歳の時にこの句の印を刻している。彼は、漢晋の塼をとても多く蔵しており、塼の字の味わいを自らの刻印の風格としていた。だから呉昌碩にとっての道は塼、つまり瓦壁にあるのである。

川尾朋子

書／箔「心」

19.5×27.2

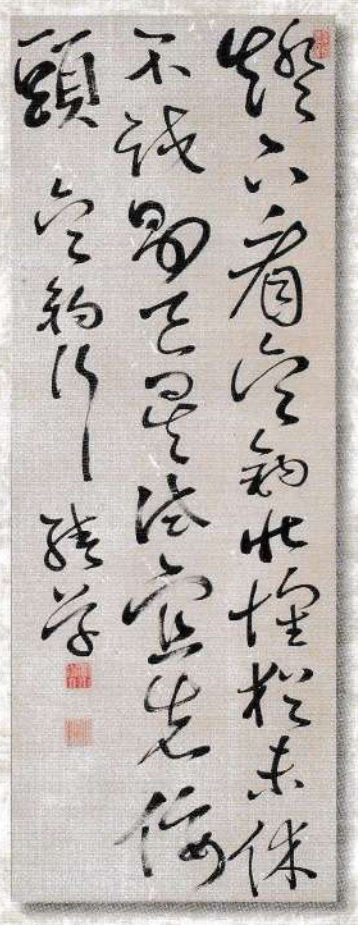
【阿波ゆかりの書人　紙上作品展】

四国大学書道文化研究センターでは、地元に関係する近世から近代にかけての書家の作品を収集し、教員展の折に、少しずつ展示して、鑑賞していただいております。

那波綱川（なわもうせん）

宝暦七～文化十（1757～1813）五十七歳

播磨網干（姫路市網干区）の出身。名は績、字は世勲、通称は大助・与蔵。永田孫右衛門直道の四男。佐々木を名のる。若年で京都に出て芥川丹邱に学ぶ。のち那波魯堂の門人となり、魯堂が徳島に招聘されるのに随行した。魯堂の没後、男子がなかったので推されて師の娘の貞と結婚し家督を相続した。寛政四年（1792）、寺島学問所の文学教授になり、享和二年（1802）、淡路島の洲本学問所の文学教授に転じ、居を洲本に移した。



鉄復堂（てつふくどう）

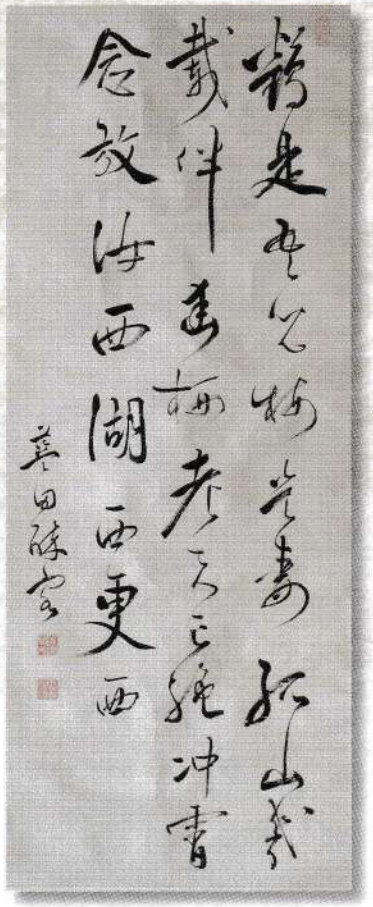
安永六～天保十四（1777～1843）六十七歳

徳島の生まれ。名は煥、字は子文、通称は嘉蔵。幼時は八木巽所に学び、長じて那波綱川の門に入る。江戸に行き古賀精里の学僕として学ぶ。加賀藩より招かれたが父の病気で辞退し、徳島に塾を開いて教え、多くの人材を育てた。

藤井藍田（ふじいらんでん）

文化十三～慶応元（1816～65）五十歳

大阪に生まれる。名は尚徳、字は伯恭、通称は平左衛門。父は阿波麻植郡牛島（吉野川市牛島）出身の呉服商。十五歳の時から漢籍を広瀬淡窓に、書を八木巽所に、画を中江藍江・田能村竹田に学ぶ。大阪南堀江に玉生堂塾を開き、尊王を説いた。幕府の目を逃れて父の実家に移り、二年後に大阪に戻るが、新撰組に捕縛され拷問を受け獄中に歿した。

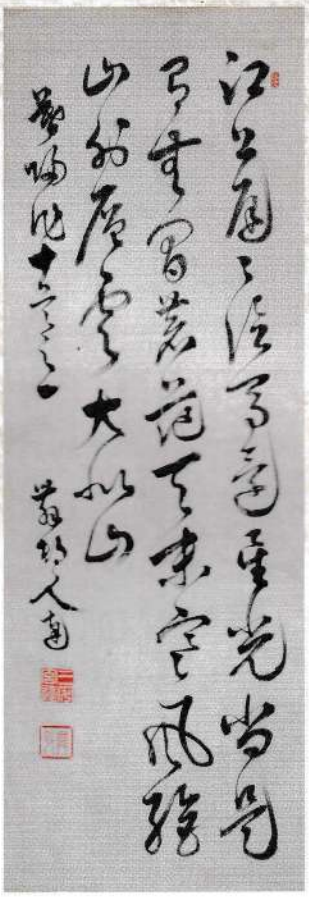


貫名海雲（ぬきなかいうん）　天保二～明治三十一（1831～98）六十八歳

淡路洲本の生まれで、外山三太夫の次男。名は正祁、通称は右近。少年の頃から能書の聞こえが高かったが、京都に遊学して貫名菘翁の門に入り塾頭となる。後に菘翁の次女の女婿となり貫名家を継いだ。菘翁が聖護院村に隠居してからは、京都室町の須静堂で多くの子弟に書や漢学を教授した。また一条家に奉仕し高貴の人々に指導することも多かった。明治維新後は東京に移って外務省書記となり、神田猿楽町で漢学塾を開いた。

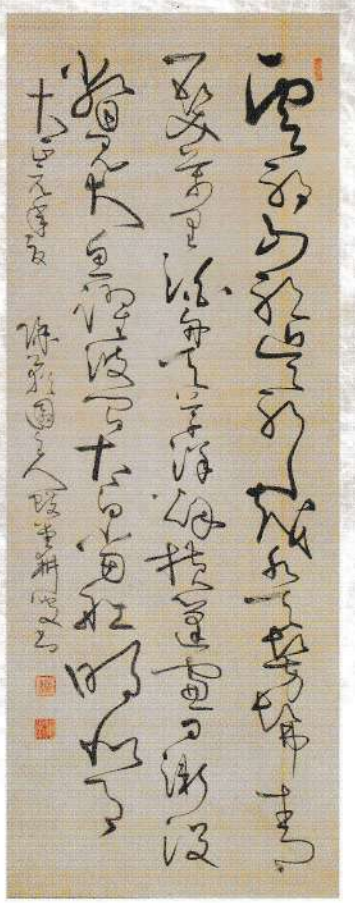
三宅舞村（みやけぶぞん）　天保五～明治四十一（1834～1908）七十五歳

阿波美馬郡舞中島に生まれる。医家、三宅速水（杏堂）の長男。名は高達、字は玄達。詩文・儒学を巌本贅庵・藤澤東畡・広瀬淡窓・旭荘に学ぶ。医学は、大阪の吉益掃部・華岡南洋に学び、のち京都の百々一郎に入門してその塾頭となる。また書を貫名菘翁に学ぶ。安政五年（1858）に帰郷して父のあとを継いで開業し、特に外科をもって知られた。明治七年（1874）、美馬郡医師組合会頭に就任。医業の傍ら、脇町郷校の講師、司読、藩校長久館の寮員を勤めた。



都郷鐸堂（つごうたくどう）　安政五～昭和十九（1858～1944）八十七歳

美馬郡一宇村伊良原の人。名は角太郎、別号は屈伸園・蠖堂。辰蔵の長男。若年で三宅舞村に学び、さらに宮内安芸・山口義長・田辺龍仙に学んで、小学校教員として和歌山市に行く。そこでは森田節斎の妻、無絃媼に漢学を学ぶ。徳島県に戻り教員をしながら書道を研鑽した。草書を得意とし、全国各地で書道の講習会を実施。出版物も多く大きな影響力を持った。晩年は視力が衰えたが、養女の手に引かれて広島・今治・京都・東京などを移転しながら遊説した。



出品目録

太田　剛（仙鳩）〈教授〉
ナスカの地上絵「猫」
パスツールの言葉
ハングル版本体「明けない夜は無い」
一字書「鎮」
『理趣経』五番偈

辻　尚子（紅雲）〈教授〉
羅隠詩二種
「蕭颯」
趙嘏詩句
金子みすゞの詩「金魚のお墓」
廣瀬淡窓の詩

森上洋光〈教授〉
金文「厳恭寅天命」
楷書『韓勅碑』

黒田賢一〈客員教授〉
「梅の花」（『万葉集』）

田ノ岡大雄〈常勤講師〉
「寒月」（蕪村の句）
「霍公鳥」（弓削皇子の歌）
「桃」（桃隣の句）
「白紙」（正岡子規の句）

渡邉周一（星舫）〈常勤講師〉
「壽與山斉福随春至」（鐘伯敬の語）
「騰龍」（『説苑』説叢）
「樂神仙道」（徐南復の語）
「盡君飲」（『小学』）

上田　普〈講師〉
「ときめき」

鹿倉壮史（碩斎）〈講師〉
「周於能」（『淮南子』）

黒木知之〈講師〉
「いろは」

小竹正高〈講師〉
「１％の勇気」（東田直樹の言葉）

松村茂樹〈講師〉
關於呉昌碩的「道在瓦壁」
（呉昌碩の「道は瓦壁に在り」について）

川尾朋子〈特認教授〉
書／箔「心」

〒771−1192　徳島市応神町古川
四国大学
学際融合研究所　言語文化研究部門
TEL　088(665)1300
FAX　088(665)8037
ホームページ
https://www.shikoku-u.ac.jp/education/gakusai-yugo-labo/lc-dep/